

## スポック博士の敗北

野田俊作（大阪）

要旨 ; The Defeat of Doctor Spock

Benjamin Spock, who was an orthodox Freudian and the author of "Baby and Child Care", attempted to prove the validity of Freudian theory. In 1959, he recruited 21 families who were expecting their first child. Each mother was consulted by eminent psychoanalysts for six years. The result of the study provided no support whatsoever for Freud's theory. The children in the study had many problems, as well as the mothers had many difficulties in child-rearing. It turned out to be impossible to predict which children would have problems later in childhood on the basis of early experiences with their parents. In short, the study had completely negative results.

La Malvenko de Doktoro Spock

Benjamin Spock, kiu estis ortodoksa Freudano kaj la aŭtoro de "Baby and Child Care", provis pruvi la validecon de Freuda teono. En 1959, li rekrutis 21 familiojn, kiuj estis ekspektataj ilian unuan knabon. Unu de dekunu eminentaj psikoanalistoj konsultis ĉiu patrino dum ses jaroj. La rezultato de la studo provizis neniun subtenon al Freuda teono. La knaboj en la studo havis multajn problemojn, kaj la patroj havis multe da malfacilajhoj en gubernado. Estis konstatite, ke la fruaj spertoj de knaboj kun gepatroj ne ebligas al ni antaŭvidi tion; kiu knabo poste havos problemojn. Post ĉio, la studo donis al ni kompletajn negativajn rezultatojn.

キーワード :

はじめに

ベンジャミン・スポック (Benjamin Spock) ほど、現代の育児に影響を与えた人物はいない。主著『スポック博士の育児書』("Baby and Child Care")<sup>[1][2]</sup>は、1946年に出版されて以来、長期にわたってベストセラーであり、アメリカでは総計4千万部を売り上げたという。また、日本語を含む世界39ヶ国語に翻訳され、各国でもベストセラーになった。それ以外にも多くの著書があり、いくつかは日本語に翻訳されている。また、アメリカの一般向け育児雑誌に多くの記事を書いて、終生にわたって母親たちに大きな影響を与え続けた。

スポックの主張は、心理学的な部分については、基本的にはフロイトの理論にもとづいている。

すなわち彼は、幼児期の育児、たとえば、離乳・だっこ・トイレトレーニングなどが、見かけほど単純なことではなく、これらの出来事に対する親の対応が不適切であると、口唇期・肛門期・エディプス期への固着がおり、一生にわたって子どもを苦しめると主張している。彼の著書の中でそのような主張を探すと、枚挙にいとまがないが、たとえば、排泄についてみると、「神経質な大人や子どもを、精神病学者が調べたところ、あまり早くからきびしい排泄のしつけをされると、大きくなってから、ひどく強情っぱりになったり、カタはずれのきれい好きになったりすることがあることがわかったのです」<sup>[3]</sup>とか、「そそうをしたときに叱りつけて、きたないことをしたとってきかせたところで、しつけがうまくいくというものでもありません。そのときはうまくいったようにみえても、こんなやり方をすると、あとになってひどく手のかかることになって、苦勞することにもなりかねません。つまり、ひとり遊びができなかったり、自分からは決して新しいことをやってみようとしないう子、なんでもきちんとできていないと気に入らない子になるおそれがあるのです」<sup>[4]</sup>とかいうようなことである。

スポックの著書を読んだ母親たちはこのような主張を本気で信じてきたし、さらに育児コンサルテーションをする専門家たちも、これらの主張を鵜呑みにしてきた傾向がある。そのような専門家たちは、臨床の場だけではなく、新聞・雑誌やテレビ・ラジオの育児相談を通じて、スポック式の育児を広く喧伝してきた。その結果、現代の育児は、多かれ少なかれスポックの、さらにはフロイトの影響下にある。

しかし、あまり知られていない事実であるが、スポックの主張は、実は彼自身によって実証的に覆されてしまっているのである。以下、これについて報告する。

## スポックの履歴

スポックは小児科医であるが、早くから精神分析に興味を持ち、1933年、30歳のときから、バートラム・レウィン（Bertram Lewin）の教育分析を受けている。レウィンは正統派のフロイト派精神科医であり、ニューヨーク精神分析協会（New York Psychoanalytic Society）の創立メンバーの一人であった。同時にスポックは、ニューヨーク精神分析研究所（New York Psychoanalytic Institute）の事例検討会に出席するようになり、5年間にわたってケース・スーパーヴィジョンを受けている。その後、1949年から、スポックは有名な精神分析医であったサンドール・ラド（Sandor Rado）から二度目の教育分析を受けている。さらにその後、70年代から80年代にかけて、三度目の教育分析を受けているようである。つまり、彼は30歳以後、終生にわたって正統のフロイディアンであり、フロイト理論の一般大衆への普及に一生をかけたのである。

## スポックの実験

1959年、スポックはフロイト理論の正当性を証明するために、以下のような実験を開始した。第一子を懐妊中の母親を募集し、21人が応募した。この母親たちに対して、6年間にわたって月に2回ずつ、精神分析学にもとづく育児コンサルテーションをおこなった。カウンセラーは、当時スポックが働いていたクリーブランドのケース・ウエスタン・リザーブ大学付属病院のスタッフ11人であり、すべてが資格を持った精神分析医であり、うち何人かはフロイトの娘アンナ・フロイト（Anna Freud）の弟子であった。

スポックの仮説は、「熟練したカウンセラーが2週に1回1時間ずつコンサルテーションすれ

ば、育児のさまざまな問題は避けられるだろう」<sup>[5]</sup>ということであった。彼が特に注目していたのは、母乳栄養・指しゃぶり・トイレトレーニング・きょうだい競合などの領域であった。子どもたちは少なくとも13年間経過観察された。

## 実験結果

実験の結果は、スポックの予想およびフロイト理論をまったく支持しなかった。スポックは、「実験群の子どもたちは、その他の子どもと同じくらい問題を抱えていた」<sup>[6]</sup>と認めている。たとえば、ある子どもは12歳になってもまだ夜尿があった。この子に対しては、9年間にわたって、精神分析的な立場から、あらゆる援助がなされたにもかかわらずである。

また、母親に対する精神分析的コンサルテーションは、育児の問題を軽減しなかったし、それどころかより困難なものにしさえした。トイレトレーニングをとりあげると、「スタッフが予想したよりも、より遅く、より困難であった」<sup>[7]</sup>とスポックは認めている。実験群の母親は、子どもが2歳前半に入るとトイレトレーニングにとりかかったが、子どもがすこしでも抵抗するとあきらめてしまって、先のぼしにした。スポックは、「これらの母親たちの努力は、一貫性を欠き、動揺していた」<sup>[8]</sup>と評価している。

21例の母親たちをより詳細に見ると、興味深い事実があきらかになる。すなわち、学歴の高い母親ほど育児に失敗しているのである。

21例のうち4例は高校卒であり、17例は大学卒であったが、高校卒の母親の方が育児に困難を感じないですんだ。さらに、スポックが、同じ病院の小児科で非精神分析的な育児コンサルテーションを受けていた母親たちを統制群として、実験群の母親と比較したところ、統制群の母親たちは実験群の母親よりも1年も早く、しかも簡単にトイレトレーニングを終えていることがわかった。スポックは、「厳格でもなく、格闘もせずに、しかも子どもの人格に傷を与えずに」<sup>[9]</sup>、統制群の母親がトイレトレーニングを終えていると認めている。これらの母親の多くは、大学を出ておらず、ブルーカラーの男性と結婚し、精神分析や心理学に関心をもっていなかった。すなわち、母親が精神分析の知識を持っていないか、うまく育児できることがわかったのである。

また、スポックは、幼児期の母子関係を観察して、そこから子どもが将来どのような性格傾向を持つかを予測しようとした。しかし、結果的にこれは失敗し、幼児期の親子関係から子どもの将来を予測することは実際上不可能であると認めている。たとえば、彼の実験群のうちの2例は、親子関係が非常に難しい子どもであったが、後にまったく問題がなくなっている。

## 考察

スポックは、彼の育児書を「自信を持ちなさい」ということばで書き始めている。皮肉にも、彼が実際に母親たちを指導すると、母親たちはすっかり自信を失ってしまったのである。さらに、子どももまた問題を抱えて育つことになってしまった。さらに、スポックの実験は、実験者たちの期待に反して、幼児期の母子関係が子どもの性格を決定するというフロイトの発達理論に対する重大な反証となってしまった。

スポックはしかし、実験の失敗を、精神分析的コンサルテーションの結果、親が子どもの敵意を過度に恐れるようになったためだと解釈し、フロイト理論に問題があるとは考えなかったよう

である。そこで、『スポック博士の育児書』の1957年の第2版（邦訳されているのはこの版）は全面改定されていて、親への敵意や性格異常のような、親を恐れさせる可能性のある記述を削除している。さらに、1989年には、新聞のインタビューで、「親に子どもの敵意を恐れさせるようにしたのは、私のような専門家です。それを元へ戻せるものかどうかわかりません。パンドラの箱は開けられてしまったのです」<sup>[10]</sup>と、きわめて悲観的に述べている。

彼が、自分の失敗がフロイト理論そのものの問題に起因するとは考えていなかったため、彼の育児書からフロイト理論にもとづく思弁が取り除かれることはなかった。たとえば、「人間は、そう簡単に感情を埋めきれものではありません。きっと、どこか別のところへ、ひょっこり顔を出すものです。たとえば神経質になったり、疲れやすくなったり、あるいは頭痛もちになったり、もっと間接的には、こどもをかばいすぎるといふ現象になったりして現れたりもします」<sup>[11]</sup> というような根拠のないフロイト式のドグマを前提にした上で、「腹が立ったら遠慮なく怒る、そういう親に育てられたこどものほうが、精神的にずっと幸福なのです。なぜかという、こどもたちも、怒りたいときに、安心して怒れるからです」といふような育児法を推奨し続けるのである。

ちなみに、結果から見て驚くべきことではないかもしれないが、この実験のデータはほとんど公表されていない。そこで、読者の方は、彼の実験が失敗したことを知らされず、相変わらずフロイト理論にもとづく誤った育児法を信じさせられ続けたのである。これは一種の犯罪ではなからうか。

この論文は、E. Fuller Torrey: "Freudian Freud", Harper Perennial, New York, 1992 に多くを負っている。

[1] Spock, B. "Baby and Child Care", Pocket Books, New York, 1946.

[2] 高津忠夫監訳『スポック博士の育児書』暮らしの手帳社, 1966.

[3] 前掲書[2], p.348.

[4] 前掲書[2], p.356.

[5] Spock, B. "A Redbook Dialogue", Redbook, April 1972, pp.80 – 141.

[6] Bloom, L. Z. "Doctor Spock: Biography of a Conservative Radical", Bobbis – Merrill, Indianapolis, 1972, pp.209.

[7] Spock, B. : "Toilet Training after 18 Months", Redbook, July 1968, pp.22 – 23.

[8] Spock, B. and Bergen, M. : "Parents' Fear of Conflict in Toilet Training", Pediatrics, 34, 1964, p.112 – 116.

[9] Spock, B. : "Toilet Training", Redbook, Nov. 1963, pp.38 – 46.

[10] Allen, H. : "Bringing up Benjamin Spock", Washington Post, 27 Nov, 1989.

[11] 前掲書[2], p.13.

[12] 前掲書[2], p.14.

## 更新履歴

2012年9月1日 アドレリアン掲載号より転載